

中級日本語学習者が考える「会話が上手」とは何か

— 本調査に向けた先行研究の分析と
パイロット調査の結果の考察 —

What does an intermediate Japanese learner consider to be a good speaker?

— Analysis of previous studies and discussion of pilot study results
in preparation for the main study —

三浦綾乃
MIURA Ayano

〔要旨〕

本稿では、将来実施する予定である、中級日本語学習者の会話に対する意識調査に向けて行ったパイロット調査について述べる。調査の目的は、学習者が会話が上手になるために必要だと思う要素を明らかにすることである。パイロット調査として行ったアンケートの結果、中級日本語学習者は、文法の正確性はあまり重要視しておらず、多様な表現を使って話すことや、自信と謙虚さをもって話すことを、会話が上手であることに重要な要素だと考えていることが明らかになった。「自信」や「謙虚さ」など、先行研究や教師向けの書籍にはあまり見られない要素が結果に現れたのは、今後教師が指導の際に考慮すべき項目として新しい示唆をもたらしたといえる。しかし、本稿で述べたパイロット調査は、回答数の少なさや調査方法に課題が残った。正確に学習者の会話能力に対する意識を明らかにするためにも、本調査では調査方法を見直し、多くの回答を集めて分析すべきだ。

Key word: 会話能力、学習者の意識、要素、コミュニケーション



1. はじめに

筆者はここ数年、「総合日本語」という中級レベルの学習者を対象とした日本語授業を担当している。その授業は4技能を総合的に練習するクラスである。授業を開講する際、学習者に目標を尋ねると、「話すのが上手になりたい」「会話が上手になりたい」と言う学習者が毎回一定数いる。内丸（2012）は中級レベルに対する学習ニーズを調査し、会話学習への要望が最も多いことを明らかにした。初級と異なり、中級は基本的な文型表現の学習が終了し、ある程度運用できるレベルである。日本語で表現できる幅が広がる時期だろう。そのため、自らの会話能力をさらに向上させたいという気持ちは十分に理解できる。しかし、筆者は学習者の言う「会話が上手」とは、具体的にどういう意味なのかと以前より疑問に思っていた。一口に「会話が上手だ」といっても、それが具体的にどのような要素を指しているのかは学習者によって異なるだろう。場合によっては、学習者自身も具体的には意識せずに「会話が上手になりたい」と言っている可能性もある。また、会話が上手になるために必要や要素や、会話能力の評価に対する考え方は、当然教師によっても異なる。授業を行う上で、学習者の日本語能力を向上させることを目的とするのは当然のことであるが、同時に学習者がその授業を履修して満足感を得られるかということも、学習効果や学習者の動機付けを考えた際に注目すべき点であろう。学習者の満足度と学習効果を高められるようなコースデザインをするうえで、学習者のニーズを正確に把握することは重要だ。学習者は具体的に、どのような要素を思い浮かべて「会話が上手だ」と考えているのだろうか。学習者が持つ会話能力に対する意識を明らかにすることが、学習者の授業に求めることを把握する手掛かりになるのではないかと思う。

本稿の目的は、学習者の会話能力に対する意識に関するパイロット調査を通して、学習者が会話が上手になるために必要だと思う要素を明らかにし、将来実施する本調査に向けた課題を確認することである。学習者が考える「会話が上手」になるために必要だと思う要素を把握することで、より学習者のニーズ、学習の目的と指導内容が合った授業づくりが可能になると考える。本稿を、今後実施を考えている本調査のための足掛かりとしたい。

2. 先行研究

本節では、教師向けの指導書と先行研究に見られる、会話能力に関する評価基準や重要視されている要素について述べる。学習者にとっての「会話」とは何であろうか。それが独話を指す場合もあれば、対話を指す場合もあるだろう。しかし、日常生活においては独話と対話を明確に区別することは難しい。本稿で扱う「会話」とは、「独話・対話を問わず、話すこと全般」と定義したい。

2.1 教師向けの指導書における会話能力の要素

本節では、授業計画や教材作成の際に教師が参考にする書籍において、どのような要素が会話能力を構成するものとして記されているのか述べたい。日本語教師向けに書かれているということは、教師が授業をする上で重視すべき要素であると考えられる。

国際交流基金（2007）は、日本語教師向けに発行した教授法に関する書籍の中で、日本語が上手か否かを判断する基準は様々だと述べ、ACTFL-OPI を例として挙げた。ACTFL-OPI は、言語を伝達の道具として捉え、会話能力を①機能・タスク、②場面／話題、③テキストの型、④正確さの4つの基準から話す能力を評価している。牧野他（2001）は、会話能力の評価のありかたについて「日本での英語教育が何と言っても文法中心なので、日本語教育でもその強い影響を受けていて、特に日本人の日本語教師は外国人の日本語の会話能力を文法能力で判断する傾向があります」（2001、23）と指摘している。そのため、ACTFL-OPI では言語知識や文法能力そのものに焦点を当てるのではなく、総合的なタスク達成能力を見ながら言語能力を評価している。また、国際交流基金（2007）は Hymes（1972）と Canale（1983）が定義した「コミュニケーション能力」にも触れて、話す力が文法知識のみに限定されないことを示している。コミュニケーション能力に関して、Canal（1983）は知識や能力によるものだけではないとし、文法能力に加えて、社会言語能力、談話能力、ストラテジー能力を掲げた。国際交流基金（2007）は「授業計画をたてるときは、文法能力はもちろん、社会言語能力、談話能力、ストラテジー能力の4つのコミュニケーション能力を、バランスよく伸ばすような授業を考えることが大切です」（2007、20）と述べている。文法能力が会話能力の向上を考えるうえで重要な要素であることは明らかだ。しかし社会言語能力、談話能力やストラテジー能力といった、タスクを達成するために必要な能力や円滑にコミュニケーションを遂行するための能力の育成も、欠かすことのできない重要な要素だということだ。

一方、教師が会話の授業で具体的にどのような要素を指導すべきかに関して、尾崎・椿・中井（2010）は、会話教材の作成のために書かれた書籍で、会話の授業で取り上げるべき主な指導学習項目を、①音声、②文の形、③話し言葉の文体、④語彙・定型表現、⑤発話機能、⑥会話の展開パターン、⑦談話標識、⑧会話ストラテジー・談話技能、⑨非言語コミュニケーション、⑩社会言語と社会文化、という順番で挙げている。どちらかと言えば、言語面の要素が重視されているように見える。実際に日本語の授業を実施すると、指導する内容は言語知識や文法能力が優先的に考えられている可能性がある。

2.2 日本語母語話者が評価する会話能力の要素

日本語学習者の会話能力に関する研究には、日本語母語話者の評価から傾向を分析したり、日本語教師と教師でない日本語母語話者による学習者の会話の評価を比較したりしたものが多くある。そういった研究から、日本語母語話者が会話能力を考えるうえで重視している要素を捉えることができる。

日本語教師と日本語母語話者はともに「コミュニケーション遂行」、「理解」、「言語規則」の3つの評価基準を用いて学習者の日本語を評価している（渡部、2005）。しかし、その基準を重視している度合いには異なる傾向があることが、様々な研究で明らかになっている。

渡部（2003）は、会話の評価尺度の開発を目指してフォロー・アップ・インタビューと質問紙による2つの調査を行った。フォロー・アップ・インタビューの調査では、日本語教師と非教師日本語母語話者計50名が対象であった。調査対象者は母語話者と学習者による自由会話のビデオを視聴し全体的な印象を語り、また、会話中で上手・下手だと思った箇所で評価板を使って示し、なぜその評価板をあげたのか理由も話した。そしてこの調査結果を基に渡部（2003）は評価の対象となる項目を選定し、質問紙による集団形式による調査を行った。この質問紙による2つ目の調査では、18歳～39歳の77名の母語話者のデータが分析対象となっている。77名のうち日本語教師は18名で、日本語教師の経験はないが日本語教育を専攻している学生は29名であった。対象者はフォロー・アップ・インタビューで用いたビデオを視聴し、学習者に対する印象がどの評価項目に当てはまるかを回答した。この研究から渡部（2003）は、母語話者は言語の運用能力だけではなく、親しみやすさや積極性などの学習者のパーソナリティに関わる因子も評価に含まれることを示唆した。また、渡部（2004）は、日本語教師の経験がなく、日本語教育学を専攻していない20歳～60歳の母語話者136名と日本語教師84名による自由会話における学習者の会話の評価を質問紙を用いて調査した。その結果、日本語母語話者は言語規則より、コミュニケーションの遂行と非言語表現を重視していることを明らかにした。

吉田（2014）は、一般日本人50名と日本語ボランティア52名に対して、ロールプレイによる雑談と交渉の場面による日本語母語話者の評価の異同について、質問紙による調査を行った。そして、どちらの場面でも文法的な項目に着目されることは少なく、母語話者の評価の方向性としては、否定的・中立的なものよりも肯定的なものが多かったことを明らかにした。また、小池（1998）は、日本語学習時間が360時間程度の学習者によるロールプレイを材料にして、学習者の会話能力に関して、日本語教師と教師ではない一般日本語母語話者の評価のずれを調査した。調査対象となった一般日本語母語話者は、言語教育に携わっておらず、外国人との接触経験もほぼない30代と40代の2名の女性で、調査はロールプレイのビデオを見ながら印象を自由に話すという形式であった。この調査から、小池（1998）は、教師も一般日本語母語話者も、円滑なコミュニケーションを遂行するために必要な要素を評価項目として注目していることを明らかにした。さらに、初級学習者の会話能力に対して、一般日本語母語話者は、学習者の悪かった点よりも良かった点に目を向ける傾向があり、文法的なミスや日本語としての不自然さに対して寛容で、正確さよりも円滑なコミュニケーションを支える能力を重視していると述べた。

日本語教師でない日本語母語話者のほうが、学習者の会話能力をより肯定的に捉える傾向があるようだが、教師経験の有無に関わらず、日本語母語話者は言語知識的な側面のみならず、学習者のパーソナリティに関わる要素や、コミュニケーションを円滑に進めるための要素を、会話能力を評価する際に重要視していることが分かる。

3. パイロット調査

本節では、学習者の会話能力に関する意識を探るために行ったアンケート調査について述べる。

3.1 調査の対象者と方法

調査は2023年7月から8月にかけて行った。調査対象者は、筆者が担当する、中級レベルの留学生に開講されている「総合日本語」というクラスを履修している学習者である。アンケート調査への回答協力を募ったところ、1名の学習者から回答が得られた。調査は匿名で行ったため、どの学習者が回答したかは不明である。調査はGoogle formを用いた記述式のアンケートで、好きな時間に回答してもらった。学習者には口頭で調査について説明し、アンケートの指示、質問は日本語と英語の両方で表記した。また、学習者のアンケートへの回答は日本語でも英語でもどちらでも可としたが、今回は日本語で回答があった。

アンケートでは、学習者は「会話が上手だ」と考える際に必要な要素やスキルを、思いついたものから順に挙げた。必要だと思う要素を選択式にしなかったのは、こちらから選択肢を提示することで、学習者が本来は考えていなかった要素・重要視していなかった要素を選んでしまう可能性があると考えたからだ。要素を挙げた後、学習者はそれぞれの要素について、それがなぜ「会話が上手だ」ということに必要だと思うのか、理由を自由に記述した。

3.2 調査結果

表1は、調査結果をまとめたものである。今回の調査では学習者は日本語で回答したため、一部日本語の意味が通りづらい箇所があった。回答者の意図が変わらないように留意したうえで、回答に書かれていた日本語の文法に修正を加えた。

表1 どのような要素が「会話が上手」であることに必要か

思いついた 順番	必要だと思う要素・スキル	どうしてそう思うか（理由）
1 番目	自分に自信をもつこと	自分に自信を持つようになったら、どんな事についても人と気楽に話せるようになれると思うから。間違えても、自信さえあれば成長できるから。
2 番目	様々な語彙、文法を使いこなせること	人と話しているとき、いつも同じ言葉を使うと、確かに意味は伝わるかもしれないが、日本語を勉強している人は、そのままではいられないと思うから。
3 番目	謙虚さ	傲慢になりすぎると、新しいことを学べないと思うから。

(※回答の日本語の文法の誤りは筆者が修正した)

学習者が初めに思いついた要素は「自信を持つこと」であった。2番目の「様々な語彙、文法

を使いこなせること」の理由は、回答者の意図がやや伝わりづらいが、おそらく文型・表現のバリエーションを指しているのではないかとと思われる。常に同じ語彙や文法を使っても、言いたいことは伝わるが、会話が上手な人は様々な語彙と文法を織り交ぜながら話すると考えているのではないか。似ている意味の文型を複数習得する段階にある、中級の学習者らしい考えであると感じた。3番目の「謙虚さ」は、すでにある日本語能力で満足せず、新しいことを学ぼうとする態度・姿勢のことであると考えられる。この「新しいこと」が未習の文法や語彙を指すのか、会話から得られる新しい情報・知識なのか、または両方を指すのかは、今回の回答のみでは判断できなかった。

4. 考察

アンケート結果から、意外だと思われた点は、学習者が「会話が上手」であるための要素として一番初めに思いついたのが言語的な要素ではなく、精神的な要素であったことだ。学習者は2番目に「文法・語彙」の言語的要素を挙げたが、3番目は「謙虚さ」であり、再び精神的な要素を挙げている。

田中（2023）は、中～上級の内向的な学習者の話すことに対する意識から、他者と対話する意思に影響を与える要因について調査した。その結果、「安心感/不安感」と「自信」が他者と対話する意思に影響している要因だと結論付けた。今回調査対象となった学習者は内向的だという印象はなかったが、100パーセント外交的で、内向的な面が皆無の人間はいない。母語でなく外国語でコミュニケーションをとるということは、どのような学習者でも少なからず不安になることが予想できる。「間違える=悪いこと」と考えて萎縮してしまう学習者もいる。学習者のパーソナリティが大きく関わりそうな要素であるが、学習者の自信を失わせないフィードバックの仕方や指導方法を考えていく必要があるといえる。

2番目の「様々な語彙、文法を使いこなせること」は文法的な要素である。理由を見ると、「いつも同じ言葉を使うと、確かに意味は伝わるかもしれないが」とあるため、学習者は語彙・文法正確さというより、使える文型・表現のバリエーションの多さを重視していることが伺える。

3番目の「謙虚さ」に関しては、今ある日本語能力で驕らずに、新しいことを学ぼうとする態度や姿勢だと考えられるが、そういった態度があれば、新しい文法や語彙を学ぼうとするだろう。そのため、「謙虚さ」という要素は2番目の「様々な語彙、文法を使いこなせること」とも関連があると考えられる。文法や語彙のバリエーションが多く、使いこなせるようになれば、自信がつくかもしれない。このように考えると、それぞれの要素は互いに関連があるといえる。

5. まとめと課題

パイロット調査の結果から、学習者は、文法の正確性や言語的要素にはあまり注目しておらず、

多様な表現を使って話すことや自信と謙虚さをもって話すことを重要な要素だと考えていることが明らかとなった。自信や謙虚さは、円滑なコミュニケーションの遂行のために必要な要素とも考えられる。こうした学習者の会話の上手さに対する考えは、渡部（2003、2004）や小池（1998）が明らかにした母語話者の評価の傾向に近いといえる。一方で、「自信」や「謙虚さ」など、先行研究や教師向けの書籍にはあまり見られない要素が回答された。これは会話を指導するうえで、教師が考慮すべき要素として新しい示唆をもたらすだろう。しかし、「自信」や「謙虚さ」が語学の授業の指導対象となるのか、また、こうした要素は学習者のパーソナリティに起因するところが大きく、指導して身に付くものなのかは議論されなければならない。

本調査に向けては、検討すべき課題が山積している。今回のパイロット調査では、一名の回答しか得られなかった。学習者の意識をより正確に、詳しく探るのであれば、できるだけ多くの回答が必要だろう。また、今回は匿名でのアンケート調査のみを行ったが、学習者が意図する要素を正確に把握するためには、記述した内容についてのインタビューが必要であろう。匿名制ではなく、アンケート調査とその回答を基にしたインタビュー調査の2つの調査を行う必要があると感じた。また、アンケートの質問項目も改善の余地がある。今回は「会話」を「話すこと全般」と定義したが、回答する学習者が想像する「会話」とはどのようなものか、その会話場面を明確にしたほうが、会話が上手であるために必要な要素がより具体的に浮かんでくるだろう。

6. おわりに

本調査に向けての課題は多いが、学習者が自身の会話を評価したり、教師や母語話者が学習者の会話を評価したりするなど、産物や成果物の評価に関する研究が多くある中で、会話の上手さの要因に関する学習者の意識調査はあまり見られない。学習者の日本語授業に対するニーズを明確にするためにも、こういった調査は意義があると考えられる。今回は中級レベルの学習者に限定して調査したが、初級、上級の学習者の意識も調査すれば、習得レベルによる会話能力に対する意識の異同に関して明らかにできるだろう。また、同じ学習者の習得段階の変化と意識する要素の変化の相関を調査しても、興味深い結果が得られると思われる。さらに、日本語教師が考える会話が上手であるために必要な要素と学習者が思い浮かべる要素間のずれの有無を分析することで、会話の授業を考えるうえでの興味深い示唆が与えられるかもしれない。この調査を、将来的には、フィードバックや、教材開発に関する研究へと発展させていきたい。

参考文献

- 内丸裕佳子（2012）「中級日本語学習者が望む学習とは何か——高等教育機関におけるアンケート調査——」『大学教育研究紀要』8号、61-72。
尾崎明人、椿由紀子、中井陽子（2010）『日本語教育叢書「つくる」 会話教材を作る』スリーエー

ネットワーク.

- 小池真理 (1998) 「学習者の会話能力に対する評価に見られる日本語教師と一般日本人のずれ——初級学習者の到達度試験のロールプレイに対する評価——」『北海道大学留学生センター紀要』2号、138-156.
- 国際交流基金 (2007) 『国際交流基金 日本語教授法シリーズ 第6巻 「話すことを教える」』ひつじ書房.
- 田中信之 (2023) 「内向的学習者における他者と対話する意思に影響を与える要因——日本語学習者のケーススタディより——」『富山大学国際機構紀要』5号、1-20.
- 牧野成一他 (2001) 『ACTFUL-OPI 入門——日本語学習者の「話す力」を客観的に測る』アルク.
- 吉田さち (2014) 「日本語学習者の言語運用に対する日本語母語話者の評価——場面により母語話者の評価は異なるか——」『コミュニケーション文化』8号、27-43.
- 渡部倫子 (2003) 「日本語学習者の発話に対する日本語母語話者の評価——評価尺度開発の試み——」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 文化教育開発関連領域』52号、175-183.
- 渡部倫子 (2004) 「日本語口頭運用能力の評価基準に対する日本語母語話者の意識調査——学習者との接触機会による相違——」『広島大学日本語教育研究』14号、81-87.
- 渡部倫子 (2005) 「日本語学習者の発話に対する日本語母語話者の評価——共分散構造分析による評価基準の解明——」『日本語教育』125号、67-75.
- Canale Michael (1983) From communicative competence to communicative language pedagogy. In Jack C. Richards & Richard W. Schmidt (eds.), *Language and Communication* (2-27). London: Longman.
- Hymes, D. (1972) On Communicative competence. In Pride, J. B. and J. Holmes (eds.), *Sociolinguistics Selected readings* (269-293). Harmondsworth: Penguin.

資料

パイロット調査に用いたアンケートの説明と質問項目

※実際の調査ではこの内容を Google form に記入し、学習者に回答させた。

<p>中級日本語学習者が考える「会話が上手」とは What does intermediate Japanese learners consider to be a good speaker?</p>
<p>この調査（ちょうさ）は匿名（とくめい）です。誰がどの答えを書いたかわかりません。この調査（ちょうさ）は総合日本語 4-D6 の成績（せいせき）に影響しません。This survey is anonymous. No one will know who wrote which answers. This survey will not affect your grade in 総合日本語 4-6D. 日本語か英語で答えてください。Please answer in Japanese or English.</p>
<p>このアンケートで収集したあなたの答えは、研究論文のために使われるかもしれません。論文や研究発表でアンケートの答えを使う場合は、個人が特定されないようにします。 Your answers collected in this questionnaire may be used for a research paper. If I use your survey answers in a paper or research presentation, I will ensure that you are not personally identified.</p>
<p>1. どのような要素（ようそ）・スキルが「会話が上手」であることに必要だと思いますか。思いうかんだ順に、書いてください。いくつ書いてもいいです。(1, 2, 3...) What elements/skills do you think are necessary to be a good speaker? Please write them down in the order you come up with them. (1,2,3...) You may write as many as you like.</p>
<p>2. 最初に思いうかんだ要素・スキルについて質問です。どうしてそれが会話が上手になるために必要だと思いますか。Here is a question about the first element/skill that came to your mind. Why do you think it is necessary to be a good speaker?</p>
<p>3. 2 番目に思いうかんだ要素・スキルについて質問です。どうしてそれが会話が上手になるために必要だと思いますか。Here is a question about the second element/skill you thought of. Why do you think it is necessary to be a good speaker?</p>
<p>4. 3 番目に思いうかんだ要素・スキルについて質問です。どうしてそれが会話が上手になるために必要だと思いますか。Here is a question about the third element/skill you thought of. Why do you think it is necessary to be a good speaker?</p>
<p>5. 4 番目に思いうかんだ要素・スキルについて質問です。どうしてそれが会話が上手になるために必要だと思いますか。Here is a question about the fourth element/skill you thought of. Why do you think it is necessary to be a good speaker?</p>
<p>6. 5 番目に思いうかんだ要素・スキルについて質問です。どうしてそれが会話が上手になるために必要だと思いますか。Here is a question about the fifth element/skill you thought of. Why do you think it is necessary to be a good speaker?</p>

